

ぼち 大阪湾再生ニュース ぼち いこか

2006.12
vol.1

人と海の関わりの再生をめざして…
楽しみながら取り組む大阪湾再生の現場を伝える

大阪湾再生 Osaka Bay Regeneration
http://www.kkr.mlit.go.jp/plan/suishin/boti2/
発行：大阪湾再生推進会議

vol.1

.....
ニュースレター発行のごあいさつ

.....
**ダイバーの特技生かして
「地球にいいこと」を**
松本貴美枝さん

.....
**～海とCANと僕～
「海の感動」を伝えたい!**
横田 涉くん

.....
行政事業紹介「下水道高度処理事業について」
.....



Copyright © 2006 大阪湾再生ニュース【ぼちぼちいこか】 All rights reserved.

ニュースレター発行のごあいさつ

大阪湾再生推進会議は「大阪湾再生ニュース・ぼちぼちいこか」の配信を始めます。愛称のぼちぼちいこかは、「ゆっくり・あせらず・前向きに」を関西弁独特のニュアンスで表現したものです。大阪湾再生推進会議の取り組みの姿勢を示しています。

大阪湾再生は大阪湾の環境を“健康体”に戻す取り組みで、海と人との豊かな関わりの再生を目指しています。スタートから3年が経過し、沿岸各地で市民グループなどによる「主体的に楽しみながら」海の環境再生に取り組む活動が生まれている中、「ぼちぼちいこか」では、さまざまな活動現場の様子や関わっている人々の生の声、特に次世代の声を紹介し、みなさまに大阪湾再生の動きをお伝えしてゆきます。

大阪湾再生推進会議

●行政事業紹介

水をきれいにするだけじゃない海もきれいにする 下水道高度処理事業について

アマモは、今回ご紹介したNPO法人CANの人たちをはじめ、大阪湾沿岸の子どもたちにも育苗の輪が広がってきている中、大阪湾への移植が少しずつ進みつつありますが、光がよく届く、清浄な海でなければ育ちません。残念ながら現在の大阪湾では、清浄さをあらかず透明度が3メートルに満たないなど、水の汚れにより光が届きにくい状況にあります。

大阪湾再生推進会議では、大阪湾に流れ込む河川や下水道などからの汚れの物質を取り除き、大阪湾の海水そのものを、きれいにしていきたいと様々な取り組みを進めています。中でも現在力を入れているのが、下水道の高度処理化。これまでの処理では取り除く事ができなかった窒素やリンを大幅に取り除き、大阪湾への流出を大幅に防ぐのです。

大阪湾の海水が清浄になれば、アマモが大阪湾全域で育つことも可能となるばかりか、そこを住処に暮らす生き物も増えるのです。「美しい大阪湾」を取り戻すための歩みは確かに始まっています。

SPECIAL INTERVIEW

ダイバーの特技生かして「地球にいいこと」を

NPO法人 CAN (環境教育技術振興会) 理事
松本貴美枝さん

「地球のためにいいことしよう」と、大阪湾で活動しているダイバーたちがいる。松原市に拠点を置くNPO法人CANの面々だ。えっ？大阪湾って潜れるの？なんて声が聞こえてきそうだが、ダイビングスポットづくりも夢じゃないらしい。理事の松本貴美枝さんに話を伺った。(続きは裏面)



～海とCANと僕～「海の感動」を伝えたい!

横田 涉くん

NPO法人CANの活動に参加しているのは、プロのダイバーのほか、市民ダイバーや学生ダイバーたち。その一人で、「活動を通じて、ますます海の魅力にハマっている」という横田涉くん(21歳＝アルバイト)に「海とCANと僕」を語ってもらおう。(続きは裏面)



●松本貴美枝さん(つづき)

サンゴ壊滅を見て「やばい」と活動開始

いつからどんな活動をやったのか?

2003年、和歌山県南部の「鹿島ビーチ」で行った「サンゴ再生移植活動」からです。みなべ沖のサンゴ礁はサンゴ生息の北限で、私たちは「リトル沖繩」と名付けてよく潜りに行っていたんですが、サンゴが壊滅状態に陥ってしまっているのを目の当たりにして「やばい」と思ったのがきっかけでした。

原因は、地球温暖化による水温の上昇や生活排水の流入と考えられるんですが、ちょっと待てよ、私たちダイバーもスキル不足から無意識のうちにサンゴを傷つけていたのかもしれない。人間が破壊したサンゴは、人間の手で復活させなくては、とね。

近くのサンゴ海域で台風の影響などで折れたサンゴのかげらを集めて、壊滅した地域に「移植」し、再生させようとした。なかなかうまくいきませんでした。5回くらいで、サンゴを接着剤で岩に固定させることに成功。サンゴ自身の力で根付き、成長につれて岩場に定着し、自然と魚たちの住処になった。その過程を定期的に写真におさめ、資料として関係機関に提供しています。

海の恩恵を受けてきたダイバーだからこそ

松本さんは、その当初からのメンバー?

ええ。23歳の時、通っていたスイミングスクールのコーチに誘われて串本にダイビングに行ったのが最初で、「うわっ。目の前に魚が!」とハマリ(笑)。会社勤めしながら休みごとに沖繩や和歌山方面に通っていたんです。鹿島ビーチもお気に入りのダイビングスポットだったので、サンゴの壊滅はショックで…。のちにCAN理事長となる関藤博史さんと知り合い、「私らダイバーは、海の恩恵を受けてきたのだから、少しでも地球環境にお返しをできることをしたいね」と思いが一致。立ち上げ当初からCANのメンバーになりました。

※NPO法人CAN(環境教育技術振興会) 松原市高見ノ里6-7-4 tel:072-332-1507 <http://www.npo-can.org/>

●横田 涉くん(つづき)

～海とCANと僕～ 「海の感動」を伝えたい!

僕と同じ水の中に魚がいる!

僕は香川県の出身で、子どものころ海辺の町に住んだことも多い。海はもともと身近な存在。高校時代はヨット部でした。動物も好きだったので、「イルカショーのお兄さん」を目指して大阪の専門学校の海洋動物飼育調教科に進んだのですが、入学して早々にダイビングの授業を受けて、「プロダイバーになりたい」と早くも方向転換したんです。

なぜって、和歌山県田辺近くの元島で生まれて初めて潜った時、「海の中は、海の上にいるのと大違いだ」とすごく感動したから。

マリンスポーツには慣れているつもりだったのに、海の中はそれまで僕が知っていた世界と全然違ってたんです。あいにくその日は透明度はそんなによくなかった。なのに、目の前を魚が泳いでいる。魚が僕と同じ水の中にフツーンいる。ううっ。僕は、もう言葉で言い表せない感動に包まれると同時に、「この感動を多くの人に伝えたい」と思った。

それから、バイトに勤んでダイビング用品を買い、時間をつくっては潜りに行き…。実家に帰った時など、高校時代の友だちに「海の中はすごいんや」と話してばかりで、友だちには「コイツ大丈夫か?」と思われていたようです(笑)。

アマモが魚の住処だった…「マジで〜?」

専門学校のダイビングのコーチが、CANの人だった関係で、CANと近づきになり、学生時代からアマモ移植の活動に参加するようになりました。

最初、アマモの話聞いた時、「マジで〜?」って思った。実家近くの瀬戸内海には、そういう、そう



冬場、海底にアマモを手植え。地下茎を伸ばし、春先に黄色い花をつける

潜っている海が汚くなったら、他の美しいダイビングスポットに移動するダイバーも多いでしょう…。

うーん。私たちは好きなダイビングスポットを見捨てるなんて出来なかった。黒潮に乗ってやって来た来遊魚を身近に見ていたから、サンゴの壊滅は魚たちの住処がなくなることだと思った。このサンゴ再生移植活動をきっかけに、いろんなことが見え始め、自然環境への興味がどんどん湧いてきたんです。

どんなことが見えてきたんですか?

たとえば、私たちダイバーも海水浴に来た人も、海辺でシャワーを使いますよね。シャンプーもする。使った水の行方はというと、そのまま薄汚い海に流れていっている。私たちが海を汚していたんだ、と改めて自覚。自然溶解する石けんを使わないといけないと気づいたり。

行政主導などで「浮遊ゴミを拾いましょう」という活動はよくあっても、「海底ゴミを拾いましょう」という活動はないと気づいたり。

なるほど。誰もが無意識のうちに海を汚しているし、海をきれいにしなくちゃと気づいていてもまだ手が届いていないこともあるわけですね。

CANは、他にはどんな活動を?

大阪府湾岸域環境創造研究センターが「都市再生プロジェクト」として、堺市浜寺公園内に、ゴカイ類・貝類などの水生生物が生息できるミニ干潟をつくと聞き、協力を買って出たり。私たちは学者でも海の専門家でもないけど、ダイビングしているからこそ、海を環境をよくしたいと思う気持ちは人一倍。——「それ、面白そうだから、やろうよ」なんです。

いう水草がいっぱい生えていた。泳ぐのに邪魔だからと切ってたんですよ、僕は。海の中のあの草が「アマモ」で、魚の住処や産卵の場として大切だったとは。おまけに、海の水をきれいにする役割も果たしていたとは。何から何まで驚きでした。

大阪湾の自然海岸率は今や4%だそうで、僕がイメージしていた大阪湾はもっと汚い海。泳いだり潜ったりできるとは思いませんでした。でも、実際に潜ってみると、想像よりも汚くなかったことも驚きでした。もっとも、30~40年前、コンクリート護岸が少なく、水質汚染が始まっていなかったころは、浅瀬の砂地が広がり、アマモも群生していたのでしょう。アマモに興味を持った僕は、専門学校の卒業研究のテーマにしました。調べると、大阪湾近郊に残る自然のアマモ場は、須磨以西と泉南地域、淡路島などわずかだけ。だから、アマモ移植活動は意義深いと思います。

寒い「楽しい」アマモ移植

アマモにかわり出して3年目になります。ペットボトルなどの容器に、海水と砂、アマモの種子約20粒を入れて発芽させ、移植可能な15~20センチに育てる「アマモ育苗セット」。これを使って、自分でもアマモを育てましたが、白い針金のような目が1本発芽した時など、「おー、お前。お前を待ってたんだぞ」とかわいくてかわいくて。毎日少しずつ育っていく様子を、自分の子どものように見守りましたね。

市民グループの人たちが11月ごろから育苗したアマモは、2月ごろに移植可能となり、その後が僕らの出番。「育ての親」から託された苗を持って、「行ってきま〜す」と海中に向かい、苗を一つずつ手植えするんですが、冬の海は濁っているし、冷たい。スウェットスーツを着ていてもぶるぶる震えるほど寒い。正直に言うと、毎回、潜るまでは気が重いんです。ところが、いざ移植作業を始めると、一転して「楽しい」という感覚に変わる。手植えは素手ですので、指先

楽しみながら自然体で活動していっちゃうからカッコいい!

いえいえ。「おもしろがり」なだけです(笑)。その延長で、アマモ移植にも首をつっこんだんです。

アマモ移植し、大阪湾にダイビングスポットを

アマモ移植? 詳しく教えてください。

アマモは浅瀬に生える海草の一種で、かつては大阪湾奥のあちこちに群生していました。アマモ場は、魚が卵を産んだり、稚魚が生育し、餌を探しにやってくる大きな魚から小さな魚が身を守るための隠れ家。まさに「海の揺りかご」だったんですが、埋め立てが進み、浅瀬に砂地がなくなった昭和30~40年代から激減。これを、移植によって取り戻そうという試みなんです。

具体的にはどんな作業を?

「アマモ育苗キット」というのがあり、市民グループなどが育てています。2、3ヶ月で移植可能な5~10センチほどになるので、それを泉南市の垂井サザンビーチとせんなり里海ビーチなどへ手植え。また、アマモ種子を付着させた「播種シート」の設置も行っています。

ダイバーだから、浅瀬での作業など得意中の得意?(笑)

それはもう(笑)。アマモは窒素、リンを吸収し、光合成も行うので、水質浄化を促すばかりか、地下茎を伸ばすことにより海底を安定化させる役目も期待できるんです。まだまだ始まったばかりで、移植後のモニタリング調査も行っていますが、定着率は1割以下です。でも、30年くらい経つと効果を発揮し、大阪湾にダイビングスポットが出来るのも夢じゃない。それに、こういった活動を行うことで、海の環境ひいては海につながる川や山の環境に興味を持つ人が増えてくれればいいなと思って。

このニュースレターのタイトルじゃないですが、「ぼちぼちこか」なんです。

はい。モニタリング調査で、自分たちが移植したアマモが育っていると飛び上がるほどうれしい(笑)。楽しみながら、ぼちぼちやっていきたいと思っています。



興味津々に話を聞く小学生たち

がっかりで、感覚がなくなってしまうほどなんですが、それでも楽しい。なぜか。これまで汚れる一方だった歴史を変える一歩を踏み出した、その現場に自分がいるという自覚と、一緒に移植しているダイバーたちの笑顔でしょうか。

アマモを媒介に「海の環境」をレクチャー

CANからの声かきり、この前、小学校に環境学習を教えに行きました。「大阪湾はどんなイメージ?」と聞くと、小学生たちは「汚い」「泳ぎたくない」と口をそろえる。「なんで汚いのだろう?」と突っ込むと、「トイレの水が流れているから」「ゴミがいっぱいだから」という返事が返ってくる。「きれいにするのはどうしたらいいと思う?」の質問には「ゴミを拾ったらいい」「生活排水を流すのをやめたらいい」と。「人口を減らしたらいい」と言った子もいました。ある意味、言い得ていますよね。

そこで、僕はアマモの話をし、育苗キットを見せて、「みんな、お家でアマモを育てて、それを海に移植しよう。そのアマモが海の中で大きくなると、海の水が少しずつきれいになり、お魚が戻ってくるんだよ」と伝える。みんな「なるほど」と聞いてくれる…。

初めてダイビングした時に「この感動を多くの人に伝えたい」と思ったあの気持ちを、アマモの話を通じて、少しずつ伝えられているのかな、とうれしいですね。小学生たちが大人になるころ、大阪湾が今よりもきれいになってほしい。そんな気持ちでいっぱいです。